琉球大学学術リポジトリ

二回目のプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構
	公開日: 2018-07-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大角, 玉樹
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41052

「二回目のプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞して」

観光産業科学部　大角玉樹

Ⅰ. はじめに　～最もハードな講義が受賞～

同じ科目で二度目、三度目のプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーを受賞した例はあると思いますが、違う科目で二回目となるとこれが初めてではないでしょうか？前回の受賞科目「現代経営のしくみ」は、私が個人で実施していた科目なので、個人としての創意工夫の結果としての受賞でした。しかし、今回受賞した「ベンチャー起業入門」は沖縄県の「次世代型アントレプレナー人材育成事業」及び世界的に展開されている起業イベントであるStartup Weekendとタイアップした先導的な産学官民連携型の講義であり、ご協力頂いた多くの関係者を含む、チームとしての受賞だと思います。したがって、本来は、関係者全員が表彰されるべきところ、講義担当責任者であり、調整役でもある私が代表して賞状を受け取ることになりました。この科目は、過去の共通科目の中では、おそらく最もハードな科目であり、関係者も「多くの受講生に起業家精神の大切さや魅力を伝えたいが、学生に媚びる講義にはしない」との思いで取り組んだ講義です。以下、開講に至った経緯と概要をお伝えしたいと思います。

Ⅱ. ベンチャー起業講座誕生の背景

ベンチャー起業講座は誕生してから4年目を迎えます。前期は「ベンチャー起業入門」、後期はビジネスプラン・コンテスト参加を含めた「ベンチャー起業実践」を開講してきました。受講生数は、初年度は関係者が積極的にPRしたこともあり、定員40名をはるかに超える人気でしたが、２年目は、「本気で取り組む学生しか受講してほしくない」との旨、オリエンテーションで非常に厳しい説明をしたこともあり激減。最後まで受講した学生との懇親会でも、オリエンテーションの内容があまりにも厳しすぎたという指摘もあったほどです。その反省から、3年目は、楽勝科目ではないことと内容やスケジュールをきちんと説明するにとどめた結果、ほぼ定員どおりで、本年度（平成28年度）は70名を超える受講登録がありました。

今から5年前、二人の情熱溢れるゲストが研究室にやってきて、「沖縄の拠点大学である琉球大学でぜひとも本気で起業家を育成する講義を開講したいので協力してほしい」との説明がありました。その一人が、シリコンバレー流のリーンスタートアップ第一人者である和波俊久氏、もう一人が宮古島出身でベンチャー支援を行っている池村光司氏。私は沖縄県人の特性や琉球大学の学生のメンタリティーをよく知っているので、お二人に対して、「琉球大学では時期尚早であり、受講生が集まらないか、ベンチャーという言葉のカッコ

よさに引かれて受講するだけで、本気で起業する学生はほとんどいませんよ」、とご返事させて頂きました。

もちろん、地方を元気にする人材、地域にイノベーションを生み出す人材は起業家的人材であり、わが国も沖縄県も政策では起業家育成が重要であることを謳っています。海外でも、イノベーション創出とそれを実現する起業家育成が国策として推進されており、単なる流行から世界的潮流に移行している動向を知っていました。しかしながら、わが国では、起業家育成教育は実施されてはいてます。一部を除いて低調であり、就職や資格取得のためのキャリア教育が主流になっていることから、少し大げさな表現ですが、実は起業家育成教育こそが最強のキャリア教育である事実が見落とされているといっても良いのではないでしょうか。きちんとプログラム化された起業家育成教育においては、今、そして将来的に、産業界や社会が最も重視している能力や資質が自然と身に着くのです。とりわけ、積極的に挑戦し、失敗しても何度でも立ち直るチカラ＝レジリエンスや、最近話題になっている、最後までやり抜くチカラ＝GRIT も修得することが可能です。さらに、将来の変化が予想できない時代に、どのような状況にも対応し、自分自身の力で未来を切り拓く変化適応能力も特筆すべき起業家的特性です。

このような背景と、お二人の情熱に負け、産学官連携推進機構（現在は地域連携推進機構）の田場氏と協議した結果、平成 25 年度から共通科目として開講する運びとなりました。ちょうど文部科学省の就業力 GP の予算を獲得していたことも幸いし、ゲスト講師の交通費や謝金が確保できることも後押しとなりました。なお、学部の専門科目ではなく、共通科目としたのは、総合大学のメリットを活かし、できるだけ学部学科の異なる学生に受講してほしいとの理由からです。また、イノベーションの源泉が多様性にあるからでもあります。

Ⅲ. 不安が現実となった初年度　～しかし、学生起業家が誕生～

先述したとおり、初年度は受講登録前から、関係者が SNS を通じて積極的な広報を行ったこともあり、事前登録の段階で満員の状況でした。産学官連携推進機構の玉城先生は、開始前に、10 人も集まらないのではないかと心配していましたが、結果を知ってホッとしていたようです。

初回オリエンテーションの教室は追加登録を希望する学生も押しかけて立ち席もでるほどの熱気でした。追加登録を認めるかどうか協議した結果、せっかくの機会なので希望者全員を受け入れることになりました。後から考えるとこれは大きな間違いでした。というのも、講義を担当する実務家講師陣は、「本気で起業に挑戦してほしい、受講生全員が起業家になってほしい」、という思いが強かったので、かなりハードな講義になることが予想されました。一方で、学生は、本気で起業を考えているわけではなく、「ベンチャー」や「起業」という流行のイメージに惹かれ、さらに、リーンスタートアップで著名な方が講義を担当するというので、少々（かなりかもしれません）浮ついた気持ちで受講したようです。

まさしくミスマッチでしたが、関係者は誰もその事実に気付きませんでした。

この年の前半、私は長期研修中で海外に滞在していることも多く、担当者とオンラインで議論したり、WebClass に書き込まれた学生のコメント等から状況を判断し、区切りとなる 3 回のプレゼンテーションで講義の成果を確認する流れとなりました。

講義開設前の打ち合わせでは、今回のプログラムは科学的なアプローチをとっていて、受講生たちはほぼ全員起業家になる、あるいは起業家精神(Entrepreneurship)が身につく設計のはずでした。しかしながら、回数が進むうちに、当初企画したプログラムは、本学の学生にはフィットしていないことに気が付きました。主に講義を担当して頂いた和波氏は、ご自身が起業家なので、それに気づいた時点でピボット（起業にあたり、うまくいかない場合に方向性を変えること）し、事前に作成したプログラムを撤廃し、学生の反応をみながら試行錯誤することとなりました。これが平均的な大学教員であれば、強引に当初予定通りに進め、講義そのものが崩壊していたかもしれません。初年度はトライアルとしての位置付けでしたが、開始早々に内容の見直しを余儀なくされる結果でした。講義内容・方法を実施しながら適宜改善していくプロセスは、まさに世界標準となっているリーンスタートアップの手法そのものといえるかもしれません。

とはいえ、途中で実施したユインチホテルのフィールドワークのリポートはお世辞にも大学生が作成したものとは思えない内容が大半でした。リポート作成については、特に細かな指示はせず、大学生であればおよそ分かっているだろうという判断で提出を求めたところ、関係者一同、目を疑うようなリポートが多数だったことから、次回以降、事前にきちんと説明しておくことが運営上の課題の一つとなりました。起業家育成教育なので、できるだけ型にはめたくないとの思いから、形式等については学生に一任したのですが、高校までの教育課程で、教員から一つ一つ細かく指示されて、それに応えてきた学生にとっては、自由裁量の大きさはかえって負担になってしまったのかもしれません。

このように、初年度は紆余曲折を経ながら最終プレゼンテーションを迎え、脱落者も多数出ましたが、開講した結果として、学生起業が二件登場するきっかけになりました。ただし、講義内容やプログラムが起業を促したというよりも、自分自身の生き方を表現し、今後も継続するには起業という手段もあるということに気付いた学生が起業したというのが正しい表現でしょう。もちろん、講義を担当した和波氏の魅力やメンターとして相談にのって頂いた産学官連携推進機構の田場氏の支援も、起業を促す大きな要因であったと言えます。

かつてビル・ゲイツやスティーブ・ジョブなど、世界的な起業家といわれる人物も、大学を中退しています。本気でやりたいことがあれば、大学教育課程そのものは退屈になってしまうのでしょう。今回、起業に至った株式会社がちゆんのケースも、サークル活動をこのまま一生継続したいと考えた時に、それを実現するには起業という手段がベストであるとの結論となったそうです。同社は、昨年、年商一億円が見込めるまでに成長を遂げ、全国のメディアにも度々紹介されるようになっています。もう一つ、株式会社 Payke（ペ

イク）を起ち上げた学生の一人は、講義にはほとんど出席していない学生でした。講義を担当する関係者としては複雑な心境ではありますが、現在は、講義のゴールを、①「起業すること」ではなく、「起業家精神」を習得すること、②キャリア設計にあたり、就職だけではなく起業という選択肢もあることを学生の時に知ってもらうこと、の二つに絞り、その延長線上で起業が生まれれば良いとのスタンスで講義運営を行っています。

Ⅳ. 三年目の挑戦　～Startup Weekend Okinawa との連携プログラム～

今回 Professor of the Year を受賞したのは、３年目の講義評価アンケートの結果によるものです。毎年講義内容を見直しながら運営しているので、その年によってシラバスや講師陣も大きく変わっています。3 年目は、起業家育成に関する県の評価委員会で、「本気で起業を考えるような取り組みにしてほしい」という発言があったことを受け、かなりハードな講義設計となりました。

4.1 講義概要

平成 27 年度のシラバスに掲載した講義概要は次の通りです。

今社会が最も求めている人材、それが「起業家的人材」です。未来が不透明さを増す中で、大切な人生を自分の力で切り拓いていく資質を身に着ける起業家育成教育は世界の大きなトレンドになっています。将来を考えると不安な学生や自分を変えたいと思っている学生も、起業家的な考え方と行動パターンを身に着けることにより、大きな自信と行動力を手に入れることができます。今年度の講義は、世界 110 カ国以上で開催されている起業イベント、Startup Weekend と連携し、琉球大学産学官連携推進機構及び起業指導の第一線で活躍されている実務家・コンサルタントとの協力の下に開講される特別な講義です。単なる起業家育成教育にとどまらず、社会貢献やイノベーションを創出できる人材育成を目的として、実践を通じたチームワークやリーダーシップの醸成、起業の国際標準になっているリーン・スタートアップ等、理論と実践を有機的に結びつけた講義を行います。

また、この講義にはキャリア形成を考えるヒントも多く含まれていて、人生の選択にあたり、就職や進学だけでなく、起業も視野に入れた幅広い考え方が身に付きます。今、企業、行政、非営利組織を問わず、あらゆる分野で最も必要とされているのは、課題発見・解決能力を有する起業家的人材であると言われています。講義を通じて、起業だけではなく、夢やアイデアを実現する人たちの思考、将来のキャリアを自らの力で切り拓く能力や考え方も同時に身につけてください。なお、後期には、沖縄学生ビジネスプラン・コンテストと連携した「ベンチャー起業実践」が開講されるので、本気で起業を考えている人は、継続して履修することにより、知識の活用能力と実践スキルを身に着けることができます。

この講義から学生起業が二件誕生しています。

4.2 受講前の注意事項

２年目のオリエンテーションの反省から、3 年目は、講義が週末に行われることと、7 月に二日半の集中講義（Startup Weekend）を実施するハードな内容であること、それから、以下に整理した注意事項を確実に説明し、納得してもらってから開講しました。もし私自身が学生なら、二単位のためにここまで頑張らなくてはならない講義は受講しないと思うほどの内容です。

① 週末を利用した集中講義なので、受講する場合はスケジュール調整をしておくこと。
② 学外での開催もあること。
③ Startup Weekend Okinawa の本番が、7 月上旬二日半にわたって実施されること。
④ 実務家の講義なので、分からない用語等は、必ず質問すること。
⑤ 指定したイベントに必ず参加すること。就職活動や教育実習等の公欠も認めないので、受講に当たっては留意すること。
⑥ 講義用の WebClass と Facebook ページの確認を怠らないこと。
⑦ 課題やリポートは指示に従い、フォーマルな文章で提出すること。稚拙な文章・内容の場合は採点対象にならないこと。
⑧ 起業や開業の実務やノウハウを身につける講義ではなく、起業家精神（アントレプレナーシップ：起業家的なモノの見方、考え方）を身につける講義であること。

結果として、定員ちょうどの 40 名が登録を済ませましたが、調整期間中に 3 名が取り消し、最後まで受講したのは 32 名でした。オリエンテーションを聞いて受講を決めた学生も 10 名いたことから、初回オリエンテーションで講義概要だけではなく、どの程度の努力が求められるかをきちんと説明し、ミスマッチを減らすことも重要なポイントと言えそうです。

4.3 Startup Weekend 体験

今回は、世界的に展開されている起業イベントである Startup Weekend のプログラムに従って、集中講義として開講する予定でした。しかし、同様のイベントに参加した経験のある受講生が皆無だったことから、事前に３回、プレイベントを実施しました。このイベントは沖縄でも５回開催されていたものの、残念ながら回を重ねる毎に参加人数が減少しているため、大学の講義と連携することにより、てこ入れを図りたいという関係者の思いもあったようです。

参考までに、Startup Weekend というのは、金曜日の夜から日曜日まで 54 時間をかけてアイデアを形にしていく起業イベントで、2007 年にシアトルで誕生して以来、世界 700 都市以上で開催されています。”The world’s starting point for entrepreneurship”、と称されるように、起業そのものではなく、起業家精神を修得する出発点という位置付けですが、結果として、13,000 件以上の起業につながっています。最近では、起業そのものを目的として開催されることも増えてきたようですが、NPO 法人 Startup Weekend Japan の李東烈理事長も、本番にあたって、起業ではなく起業家精神を身に着けることが目的であることを強調されていました。プログラムの流れは、初日に軽食を取りながら交流を深め、ピッチというショート・プレゼンテーションを行い、参加者がチームを編成していきます。二日目に、メンターから講義やアドバイスを受け、チームごとに作業に入っていきます。そして、最終日に、審査員を前にプレゼンテーションンを行い表彰。その後、懇親会を行い、交流を深めるだけではなく、実際の起業に至るケースもあるようです。

シラバスには、三回開催されるプレイベントに最低 2 回は参加するように指示しており、結果として、一回目が 25 名、二回目と三回目は 24 名と、概ね高い出席率でした。プレイベントは、沖縄の抱える問題をとりあげ、グループワーク形式でディスカッションを行い、解決策をまとめるアクティブ・ラーニング形式で行われ、随所にスタートアップで求められるショート・プレゼンテーション（ピッチ）やデザイン思考等の要素が取り入れられていました。開催場所が、宜野湾 Gwave のお洒落なインキュベーション・ルームであり、実務家や社会人等も加わったことから、受講生は通常の教室で実施するワークショップよりも、テンションが高くなっていたのが印象的です。

7 月 3 日から 5 日にかけて実施された本番では、Startup Weekend Japan 代表理事の李氏がファシリテーションを担当し、イベントを盛り上げてくれました。参加者 70 名のうち半数は第一線で活躍中の起業家、実務家であったことから、学生は大きな刺激を受けたようです。

V．結びにかえて

以上のような経緯で実施した三年目のベンチャー起業入門。終了後、大学指定の講義評価アンケートと記名式による詳細なアンケートを実施しました。後者の詳細と改善点等は、末尾に紹介した大学紀要にまとめています。最後まで受講した学生の評価はほぼ満点だったこともあり、本年度も継続開催したかったのですが、開催に必要な費用とスタッフが準備できなかったため 4 回目となる平成 28 年度は座学とワークショップ中心の講義形式に変更して開講しています。今後の方向性としては、ベンチャー講座の OB が中心となって企画運営する講義に移行し、本気で起業を目指す学生には現在の支援体制を拡充し、メンターや関連機関を紹介するスキームにしていきたいと考えています。

本文でも触れたように、起業家育成教育はキャリア教育としても効果が高いだけではなく、もともと課題解決型の教育であり、形式も本来的に積極的なディスカッションやワークショップを含むアクティブ・ラーニングです。地方創生の実現に向けた地域課題や社会課題の解決をテーマに実施することも可能です。その点が評価され、ベンチャー起業入門とベンチャー起業実践は、平成 29 年度から新規開設される、「地方創生副専攻」科目に組み込まれました。

今後の課題としては、①起業家育成教育で修得できる汎用スキルを可視化すること、②「起業家育成教育は起業するための、あるいは会社を作り運営するための教育である」との勘違いや偏見をなくし、実践的なキャリア教育として普及を促進すること、および、③無理なく運営できるように教育手法を標準化すること、の三つがあります。これらの課題を解決することにより、21 世紀型スキルを確実に、自然体で修得できる教育手法を確立していきたいと思います。

（備考）

ベンチャー起業講座の内容や起業家育成教育の動向についてさらに詳細を知りたい方は、次の文献をご参照ください。大学紀要は、琉球大学図書館のリポジトリから閲覧可能です。

拙稿「産学連携教育の新展開 ： レジリエンスを高める起業家教育プログラム」」『琉球大学經濟研究』、第 89 号、25-48 頁（単著：平成 27 年 3 月）、拙稿「イノベーション人材育成に向けた産学官ネットワークの可能性：実践的起業家育成プログラムの開発と今後の課題」『琉球大学經濟研究』、第 87 号、45-68 頁（単著：平成 26 年 3 月）、「起業アイランドへの海図：起業家教育はもう一つの知の源泉である」『琉球大学: やわらかい南の学と思想第 5 巻』（単著：平成 25 年 3 月）、および、経済産業省『「生きる力」を育む起業家教育のススメ』（平成 27 年 3 月）。

講義用の Facebook ページを開設しているので、「琉球大学ベンチャー起業講座」で検索して、過去の取り組み内容を概観して頂ければ幸いです。なお、参考までに、本学のベンチャー起業講座が契機となり、普天間高校がキャリア教育の一環として起業家教育プログラムを実施し、地元テレビや新聞でも紹介されました。